インタビュー

VOL.14

大橋　まひろ　先生
京都第一赤十字病院乳腺外科　副部長

臨床→研究→非常勤→そしてまた臨床、4人の子育てとキャリアのバランスは変化する

2025 年 1 月 10 日に、「キャリア・復職支援のロールモデル座談会」を開催し、重見博子先生と大橋まひろ先生を囲んでセンタースタッフがお話を伺いました。座談会の中での大橋先生のお話をインタビュー形式でまとめました。

1　自己紹介をお願いします

京都第一赤十字病院乳腺外科の大橋まひろです。息子が4人います。人に自慢できるようなキャリアではないのですが、私がその都度悩みながら行ったり戻ったりした道のりが、後輩の先生方や女性医師が多い診療科の医局運営の何かの参考になったらと思ってお話しさせていただきます。

2　これまでのキャリアの軌跡について教えてください

卒後、初期研修から前期専攻医までは普通のキャリアで乳腺外科に入局し、3～5年目に外科専攻医をしている時に、子供を2人産みました。8年目に入学した大学院（予防医学教室）で3人目の子供が生まれました。4年間の大学院での基礎研究がとても楽しくて、研究を継続するために大学のフューチャー・ステップ研究員に採用していただき、更に4年間研究メインの生活をしました。このまま基礎講座で研究を続けるのか、いずれ臨床に戻るのかを迷いながら計8年経ってしまいました。この間、非常勤勤務を続けて臨床の力を落とさないよう気をつけてはいたのですが、第一線で臨床をすることへのモチベーションが低下しキャリアにすごく悩んでいました。この時期が最初のキャリア選択の悩みの時期です。

基礎講座のポジションのお誘いもいただいたのですが、研究は楽しいのに外科への未練もあって基礎研究に専念しますとも言い切れず、悶々としていたところに夫の静岡県への異動が決まりました。

3 それが大きな転機になったのですね

かの決断を迫られました。子供が小学生のうちしか家族で引っ越せないと思ったこともあって、夫についていくことを決断しました。乳腺外科の関連病院がなかったので就活が必要になり、いわゆる転職エージェントも含めて幅広く情報収集しました。その中で、知らない土地で自分の医師としての力を証明するものは、学位や専門医、マンモグラフィの読影資格といった形として見えるものしかないことを改めて実感しました。

ところが病院が決まりかけたところで第4子の妊娠が発覚し、しばらくは無職を覚悟で静岡に引っ越すことになりました。私は京都生まれの京都育ちだったので、当初は文化の違いに戸惑いましたし、折しもコロナ禍で人との交流もない状況でした。知らない土地で出産し、家にこもっているのはしんどかったですね。それでも、子供が学校から帰ってくるときに家にいる生活は初めてで、ただいま～、おかえり～、というやり取りが新鮮でしたし、帰ってくるなり今日の出来事を話してくれるのを聞きながら、これはなんと貴重で幸せな時間かとしみじみ感じました。手間がかかるから敬遠していた少年スポーツや、他にも習い事もたくさん始めました。子供たちのサポートが存分にできることにも充実感を感じました。

仕事の方は、四男を出産して半年後にたまたまのご縁でマンモグラフィ読影医が足りなくて困っているというところで非常勤を再開しました。自分の得意分野を活かせるピンポイントの仕事をとても感謝していただき、必要とされる場所で専門性を役立てられることが嬉しく、社会とのつながりや仕事への手応えを改めて感じることができましたし、久しぶりにいただくお給料もとても嬉しかったのを覚えています。

スタートはちょっとしんどかったのですが、振り返るとそれなりに充実した2年間でした。私にとっても子供たちにとっても必要な時間だったのかなと思っています。

静岡で2年経ったところで、長男次男の進学の関係で私は京都へ戻ることにしました。夫の静岡勤務はもう 1 年続く予定でしたが、私が子供 4 人を全員引き受けて京都でワンオペ育児は不可能だと思ったので、子供達をどう分けるか、悩みに悩んで夫とはかなり話し合いましたね。結果、保育園は給食も出るし遅い時間まで預かってくれる、ちいさな子は手がかかるけれども、小学生のように宿題をみるとか提出物をチェックするとか習い事の大変さはないので、夫一人で面倒をみることができるのは 1 歳児だという結論に達し、夫と四男を静岡に残して、私が上の子3人と京都で暮らすことになりました。

夫もなかなか大変な一年を過ごしたみたいですが、末っ子は無事に2歳になって翌年夫とともに京都に帰ってきました。

4 京都での仕事をどうするかということになったのですね

京都に戻ることになったときにまた、キャリアの選択に悩みました。非常勤の楽な生活を続けるのか、

臨床をするのか、研究をするのかをすごく悩んで、友人や先輩後輩にもいろいろ相談したのですが、決め手は乳腺外科の直居教授からのアプローチでした。私が静岡にいる間に教授に就任されたので面識がなかったのですが、面談に呼んでいただいて「臨床か研究かで悩んでいます」と伝えたら、「まずは臨床です。自分宛の紹介状がくるくらい臨床をきちんとして、余裕があったら研究をしたらどうですか。」と言われて、迷いが晴れました。希望の病院についても、「いくつか候補の病院があります。医局からも子供が4人いて大変だという状況は伝えておくので安心してください。」というやり取りを何度もしていただきました。私が戻ることを歓迎しているというメッセージをいただいたことが大変心強くありがたいものでした。

１０年ぐらいブランクがあったので、病院選択については、上司がいて外科医としてのリハビリがちゃんとできるところ、という希望を出したところ、京都第一赤十字病院を提示していただきました。そんないい病院に行かせてもらっていいのかなという思いもあったのですが、せっかくなので頑張ってお受けしようと思い、お世話になることにしました。復職の際に、丁寧なヒアリングをしてもらったということが大きな安心材料となりました。

5　京都第一赤十字病院での乳腺外科のお仕事と今後の予定はいかがですか

今まで勤務したどこよりも忙しい病院なので、仕事と家庭のバランスが大きく変わって、慣れるまで時間がかかりました。慣れればやりがいも大きい病院です。直居教授や医局スタッフの先生方が、私の状況について勤務先にも丁寧に共有してくださり、病院の先生方にも温かく受け入れていただきました。そのおかげで、無理のない形で復職のスタートを切ることができ、とても感謝しています。

今後、プライベートでは3年後に次男の高校受験と三男の中学受験と四男の小学校受験がトリプルでやってきます。これまでも子供の受験の時期がなにかとしんどかったので、そこをどう乗り越えていくか、受験経験者からぜひアドバイスをいただきたいです。

6　大橋先生のロールモデルはどなたですか

まずは実母です。学生結婚した専業主婦ですが、娘達には「手に職をつけなさい、できれば国家資格をとって社会的責任を果たしなさい。」と言って育てました。母の影響で、私は専業主婦になる選択肢をもちませんでした。

実母と対照的なロールモデルとして、バリキャリ研究者の従叔母がいます。働く母親への理解がない時代に、好きな研究を諦めることなくバリバリ切り開いてきた方です。その従叔母から「女性は出産もあるし、どうしても少し休まないといけない時がある。しんどい時にはどんなにゆっくり歩いてもいいけれど、止まってはいけない。止まったら、もう動けなくなるから」と言われたのが心に残っています。

乳腺外科の身近な先輩には子持ちの女性はいませんでしたが、職場の子育て経験者の先輩方、他科の先生や看護師さんたちには、妊娠期の体調不良や、子供の発熱などで思うように働けない時のつらさなどに対して、折に触れて「大丈夫？」と気にかけていただきました。直接何かを解決していただいたわけではなくても、見守ってくれる、理解してくれる人がいると感じられたことは心が折れずに仕事を続ける大きな支えになりました。

私達の世代よりもっと苦労して両立をしてこられた重見先生が「若い子持ちの世代のサポートをしたいと思っているよ」と言ってくださったときには、自分が上の世代になったときには、ぜひ下の世代をサポートしたいなと思いました。

これまで出会った先輩方すべてが私のロールモデルだともいえますね。

7 後輩に伝えたいメッセージを教えてください

1つ目は「優先順位1位は自分の人生」です。自分の人生は自分でしか幸せにしてあげられません。こういう風になりたいと思っていても、異動や子供や介護など、どうにもならないことがたくさんあります。そんな時には 0 か 100 で、仕事を続けるかやめるか、ではなく、ちょっとペースダウンやキャリアダウンしても、いつか戻ってきたらよいと思えたら楽になります。

2つ目は「取れるものは取れるときに取っておく」です。症例数、論文、学位、専門医、すべて保険になります。いつどんなキャリアの変化があるかわかりませんが、これまでの自分の頑張りの証明になります。

3つ目は「たくさんのロールモデルをもつ」です。一つの正解にこだわらず、その時々で柔軟に選択できると気持ちが楽です。医局でも、バリバリ働くキャリアだけを正解とせず、ちょっとゆるっと働くのも許容してもらえたら、将来その先生が戻ってきた時には下の世代のサポートをしてくれるのではないかと思います。

8 最後にひとことお願いします

私自身のキャリアは右往左往してきたのですが、おそらく子育て中の医師の悩みには似通ったところがあると思うので、自分の経験が誰かの役に立ったら嬉しいです。迷ったときに思い浮かべられる選択肢は多い方がいいですね。キャリアを極める人も、ゆるゆるやっている人も全部正解だと思うので、いろいろなロールモデルのひとつになれたらと思います。どちらかというと男性医師は仕事に邁進するモデルが多いのは気の毒かもしれません。男性医師も子育て中は非常勤になったり、キャリアダウンしたっていいと思います。男性医師のロールモデルも紹介してほしいですね。

貴重なお話をありがとうございました。大橋先生のキャリア選択の悩みポイントでの考え方と選択は非常に興味深く、キャリアの岐路に立つものにとって、多くのヒントや勇気を与えてくれるものでした。別の機会にでも、パートナーと 1 歳のお子様との静岡での 1 年間の生活についてもお伺いしたいですね。